

令和元年6月20日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02007

研究課題名(和文) 応用倫理学における精神医療倫理と合意形成

研究課題名(英文) Psychiatric ethics and consensus building on applied ethics

研究代表者

屋良 朝彦(Yara, Tomohiko)

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：90457903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神医療倫理における障害者の地域移行・定着支援のための方法論の開発である。そのために、障害者との対話技法の開発として、オープン・ダイアログの研究や、ボルク＝ヤコブセン、リクール、タウシグらのミメシス論・トランス論研究、渡辺哲夫の狂気と祝祭性論、井筒俊彦の神秘主義論の研究を行った。また、対話技法の実践研究として、ほぼ月1回のペースで精神障害者との対話集会を行った。

以上の活動により、研究成果を論文「多声性と祝祭性 精神障害者との対話実践に関する哲学的考察」にまとめ、2019年1月に日本医学哲学・倫理学会『医学哲学 医学倫理』(2019年37号)に投稿し、受理された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害者や発達障害者、あるいは引きこもりの人々の社会復帰は、現代日本の喫緊の課題である。その解決ためには、当事者が抱えている問題について、周囲の人々の理解を深め、当事者とともに対話して解決していく必要がある。そしてそのためには、当事者だけではなく、周囲の人々の対話能力も高めなければならない。

本研究は、当事者と周囲の人々の対話を促進するための対話手法の研究である。方法論としては、現在精神障害者の対話を中心とした精神療法としてのオープン・ダイアログを参照し、その方法論の習得だけでなく、その哲学的含意を、ボルク＝ヤコブセンやタウシグのミメシス理論を基に探究する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the methodology of promoting social co-existence with the people with mental disorder or other mental handicap. For this aim, we have examined the narrative therapy method "the Open Dialogue" that has been developed by Yaako Seikkula in Finland to care for the patients with mental disorder. And in order to scrutinize this method, we have consulted the philosophical theories of Mikhail Bakhtin, Mikkel Borch-Jacobsen, and Michael Taussig.

And this year, I published the paper "Polyphony and Festivity: Philosophical consideration on the dialogue with the people with mental disorder" to Annals of the Japanese Association for Philosophical and Ethical Researches in Medicine, 2019, No37.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：医療倫理 精神障害 コミュニケーション 対話 オープン・ダイアログ ミメシス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ここ数十年で精神医療は大きな転換を迎えた。厚生労働省が平成 16 年 9 月に「精神保健医療福祉の改革ビジョン」を提示して以来、精神医療は「入院医療中心から地域生活中心へ」という方策が実施され、障害者が退院・退所し、地域への定着を促す事業が推進されている。具体的な実施要領として、「精神障害者地域移行・地域定着支援事業実施要領」などがあり、各地方自治体のマニュアルも整備されつつある。

他方で、障害者の地域移行を支援する新たな精神療法も開発されている。特に、米国ウイスコンシン州立メンドータ病院を中心に開発された包括型地域生活支援プログラム (Assertive Community Treatment, ACT) 及び、フィンランドのケロプダス病院を中心に開発されたオープン・ダイアログというアプローチが国内でも紹介・導入されている(注 3)。これらのアプローチはいずれも、患者の声の傾聴と対話を重視するナラティブ・アプローチを採用し、障害者の在宅での自立支援に大きな成果を上げている。

2. 研究の目的

近年、精神医療は「入院中心から地域生活中心」に方針が転換され、精神障害者の地域移行・定着事業が推進されているが、そのために新たな倫理的問題が生じている。元来、精神医療倫理は患者自身や他者の安全のために非自発的な治療や一時的拘束などが避けられない場合があるなど、非常にデリケートで困難な問題を抱えている。今回の医療政策の転換で、医療従事者は地域住民とのトラブル解決や地域関係者との協力関係の構築など、紛争解決・合意形成の役割が求められている。本研究の目的は、地域移行・定着事業推進において予想されるトラブルを解決し、協力関係を構築するための紛争解決・合意形成論を確立し、医療従事者の倫理教育カリキュラムを構築することである。

3. 研究の方法

精神医療、とくに地域移行・定着支援において現在生じている問題点、検討すべき倫理的問題を抽出し、整理する。また、ACT のプログラムやオープンダイアログの理論と実践を批判的に分析し、その可能性と限界を明らかにする。以上を通して、紛争解決論や合意形成論を導入する可能性と限界を明らかにする。

4. 研究成果

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 13 件)

2019 年

- (1) 屋良朝彦.(2019).多声性と祝祭性 精神障害者との対話実践に関する哲学的考察 . 日本医学哲学・倫理学会 学会誌『医学哲学 医学倫理』第 37 号
- (2) Kanemitsu, H. (2019). The Robot as Other: A Postphenomenological Perspective. In *Philosophical Inquiries*. Vol.7, No.1. Pp.51-61. 【招待論文・査読有】

2018 年

- (3) 金光秀和. (2018). 職業人としての倫理観を育成するための教育手法—大学における教育実践からの考察—、産業教育振興中央会『産業と教育』793: pp. 2-7. 【招待論文】

(4) Kanemitsu, H. (2018). New Trends in Engineering Ethics: A Japanese Perspective. In Albrecht Fritzsche and Sascha Julian Oks (eds.), *The Future of Engineering: Philosophical Foundations, Ethical Problems and Application Cases, Philosophy of Engineering and Technology series*, New York: Springer. pp. 243-256.

【査読有】

(5) Balakrishnan, B., Tochinai, F. and Kanemitsu, H. (2018). Engineering Ethics Education: A Comparative Study of Japan and Malaysia. In *Science and Engineering Ethics* (2018) <https://doi.org/10.1007/s11948-018-0051-3> 【査読有】

(6) 松本大理「カント倫理学と討議倫理学——格率の主観的吟味と相互主観的吟味」
日本カント協会編『日本カント研究 19 カントとフランス哲学』、知泉書館、
2018年7月30日、90-103頁。

2017年

(7) Kanemitsu, H. The Robot as Other: A Postphenomenological Perspective. In *Methodic Analytic Perspective Vol. 5* (7). forthcoming. (査読有) 2017.

(8) Kanemitsu, H. New Trends in Engineering Ethics: A Japanese Perspective. In Albrecht Fritzsche and Sascha Julian Oks (eds.), *The Future of Engineering: Philosophical Foundations, Ethical Problems and Application Cases, Philosophy of Engineering and Technology series*, New York: Springer, forthcoming (査読有) 2017.

(9) 松本大理「カントの実践哲学における「経験」について」、北海道大学哲学会『哲学』53、39-55頁。(査読なし、依頼論文、掲載予定) 2017年

2016年

(10) 金光秀和。「技術の倫理への問い—実践から理論的基盤の探究へ—」北海道大学 (博士論文・査読有) 2016年

(11) 本田康二郎「21世紀のネオ・ラディズム —人工知能が引き起こす労働問題」 『金沢医科大学教養論文集』、第44巻、pp.1-10、2016年

(12) 本田康二郎「テクノ・パブリックの自律 福島原発事故再考」『科学技術社会論研究』 (12) 215-226 2016年 (査読有)

2015年

(13) 井村俊義「忌避される死と近代的思考：生と死を相対化するためのいくつかの視点」、『長野県看護大学紀要』、第17巻、101-109。(査読あり) 2015年

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計5件)

(1) 井村俊義『チカーノとは何か 境界線の詩学』水声社2019年3月

(2) 屋良朝彦「『世界の散文』—表現という問題系の射程—」、松葉祥一他編『メルロ＝ポンティ読本』、法政大学出版局、(分担執筆) 2018年

(3)金光秀和、第2章「倫理問題の考え方」pp. 29-56、第3章「組織の社会規範としての倫理綱領」pp. 59-80. 金沢工業大学・科学技術応用倫理研究所編『本質から考え行動する 科学技術者倫理』白桃書房. (分担執筆) 2017年

(4)井村 俊義、「ポストレイス時代におけるロードとコミュニティ サルバドール・プラセンシアの『紙の民』を中心に」、山本昇他編『アメリカン・ロードの物語』金星堂分担執筆) 2015年

〔翻訳〕

(5)井村俊義、マイケル・タウシグ『模倣と他者性』(水声社)(2018年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(1)研究代表者

屋良 朝彦(YARA, Tomohiko)

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：90457903

(2)研究分担者

・井村 俊義 (Imura, Toshiyoshi)

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：00647943

・森野貴輝(Morino, Atsuki)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：00586969

・金光 秀和 (KANEMITSU, Hidekazu)

金沢工業大学・基礎教育部・准教授

研究者番号：50398989

・本田 康二郎(HONDA, Kojiro)

金沢医科大学・一般教育機構・准教授

研究者番号：40410302

・松本 大理(MATSUMOTO, Dairi)

山形大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：20634231

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。